

書評

サイエンスブックレビュー

科学技術は倫理を語りうるか

猪野修治（閏月社，2011年）

湘南高校 右近修治

猪野修治氏は APEJ 草創期からの会員で、その頃は東京家政学院で物理の教鞭を執られていた。現在は科学史、科学思想に焦点を絞られ、自由闊達な執筆活動に専念されている。

以前、氏が湘南科学史懇話会を主催されていた折、私は何度かお尋ねし、またそこで発表もさせていただいたことがある。著書でしかお名前を拝見できないような科学史の大家から、僧侶、市民活動家、研究者、教育関係者、作家、会社員、一般市民など、実に多彩な顔ぶれが集まり、1回1テーマで白熱した議論が交わされる。テーマと議論の内容はその後で自費出版される「湘南科学史懇話会通信」に詳細にわたってまとめられる。含蓄のある重厚な論議に私はついていくのがやっとだったが、今から思えば実に貴重な体験だった。おそらく氏は、大学研究機関を中心としたアカデミズムとはまったく異なる次元での、市民ボランティアによる、学問的で実践的でもある高度な研究会を目指されていたと思う。

テーマと発表者は、主催者である猪野氏がお決めになる。これは、と思い定めると、その方の著書を片端から読みこむ。「読む」ではなく「読みこむ」である。納得がいかなければ、著書を毎日持ち歩き、ボロボロになるまで何度でも読み返す。氏にとって「読みこむ」という行為は、著者との真剣勝負なのである。

ここに紹介する氏による最新の著作は、次の書き出しで始まる。「本書は私の書評集である。しかし書評とは言っても、数々の書物を高みから論断・批判するなどと言うものではない。あくまでもそれぞれの著者たちが長い年月を費やし真摯な精神を傾けて完成された一冊の書物に敬意を表しつつ、私なりに本腰を入れ感情移入することもいとわず読みこんできたものばかりである。つまり、私はこれらの書物に未熟な私自身の勉強のためと、大げさな言い方になるが、人生の指針と手がかりを心底求めてきたものである。...」

最後にある文章が決して大げさな表現ではないことは、氏を知る人ならばおそらく納得できるだろう。この書物は、こうして切り結んできた氏の、著作達との格闘の記録でもある。

本書は科学史・科学思想を中心として「Ⅰ破滅の科学に抗って」「Ⅱ科学史の馥郁たる果実」「Ⅲ人間主義への回帰」の3つのテーマで括られた、53冊の書評集である。選ばれている著作はポピュラーなものも含まれてはいるが、概して辛口なものが多い。APEJに縁のあるところでは、斉藤三夫氏「物理学史と原子爆弾」がⅠのテーマで、山田大隆氏「心にしみる天才の逸話20」「天才科学者の不思議なひらめき」がⅡのテーマで挙がっている。

中でも目を引くのは佐々木力氏の「科学論入門」「学問論」「マルクス主義科学論」「デカルトの数学思想」の4書、そして山本義隆氏の「磁力と重力の発見」「16世紀文化革命」の2書である。氏は佐々木力、山本義隆両氏の著作はほとんど読破されていると思われる。

幸い私は「科学論入門」を以前に新書で読んだことがあり、「マルクス主義科学論」は岩波の「思想」に連載していた頃に読んだ。（「学問論」と「デカルトの数学思想」は大切に書庫に積んである。）「科学論入門」は環境を基調とする社会主義的価値観の探求を目指す、新たな科学技術論を提言する意欲的な著作である。猪野氏はここで次のように書いている。「市民運動の現場と学問的営為の世界を「じっと」見てきた評者には、両者の相互交流が欠如しているのが、見える。これまで調査研究費の出所などまったくもたない市民運動家（評者もそのひとり）がいかに身銭を切り、生活を切り詰めながら、生活世界の転換のための運動を担っているかを、よく知っているからである。本書は、生活現場重視のひとびとからの批判の声に謙虚に耳を傾けることで、新たな「健康的な科学論」の息子・娘を生み出していくだろう。」また、「マルクス主義科学論」の項には「評者はかつて著者に、ロシア革命時代の社会と科学と思想の歴史的分析を科学史的視点から本気でやらねばならない、それが科学史家としての責任ではないかと、熱く語ったことがある。そのとき、著者はただ黙って聞いているだけであったが、今から思えば、そのときにはすでに本書執筆の構想を練り上げていたのである。」

この書評集には、単なる与える側の著作と受け取る側の評者の関係を超えたものがある。それが切りむすびの関係であり、書評の行間には市民運動家としての猪野氏自身が随所に顔を出す。この本は書評に名を借りた実践的な思想書でもある。猪野氏によって配列された書物達の顔ぶれを見ているうちに、氏による周到な戦略も見えてくる。

大災害に見舞われている今日、ここで取り上げられている硬派な書物達から改めて学ぶところは、とても大きいのではないか。